

休止符と緊迫感

休止符と言うのは音楽を記す記号の中で、音のない部分に対応するものである。

これはだれでも知っていることだが、この音のない部分の性格がなかなか難しいところで、この小文ではこの辺りを少し考えてみたい。

まず私たちの身近にある無音の意味を考えてみよう。

音楽的な時間の中で意味のある無音というとすぐ思いおこされるのは、能の「道成寺」や「石橋(しゃっきょう)」の中のあの極端に音の少ない部分である。「道成寺」の乱拍子では、鐘の供養に寺を訪れた白拍子が烏帽子をかりて舞を舞う、その殆ど無音の舞の節目に厳しく打ち込んで行く小鼓とヤ声(かけ声)が、極めて激しい緊迫感の強い時空を作り上げる。

この場合、実際の演能の舞台を見れば誰でもすぐにわかるが、音の無いところは単に音が無いだけではなく、次の行動、身振り、それもほんの少し爪先をあげる、または下ろすなどの微妙な身振りを食い入るように待ち受けて、そこに気合いをあわせて鼓を打ち込む、そのような非常に緊張の強い時間なのである。この時間は単なる静寂ではなく、意識の中で音が充満しそれが堪えきれなくなって突出し、あの激しい、突然訪れるクライマックスである「鐘入り」に至るあの急激な変化に先立つ、押えに抑えた張り詰めた時間なのである。

このような無音について語る時、よく西欧の音楽の休止符は単なる音のない時間だが、日本の無音は非常に意味の深い重みのある無音であると言う言い方がされることがある。

確かに日本のそれには深い重みの実感があるが、同時に西欧のそれも非常に深い意味があるように私には感じられるのである。

例えばベートーベンのピアノ・ソナタ等を聞いていてもあのダイナミズムの中での休止符のあり方には同じ様な気合い気迫が感じられ、西欧も日本も実に同じだなあと感じさせられる。どうも日本の無音だけが特殊なのではないように思われるのである。

西欧の音楽の流れの中でこれをたどって見るとそれはグレゴリア聖歌に行き当たる。

グレゴリア聖歌ではアルシスとテージスが歌唱の基礎となっている。このアルシスとテージスは飛躍と休息の意味だが、この休息は必ずしも休むことではなく、次の飛躍のための準備を意味している。つまり準備と飛躍の連続がグレゴリア聖歌のダイナミクスを作り上げているのである。グレゴリア聖歌のダイナミズムは、あのラテン語の歌詞とその音の動きを的確に表現するネウマにより記述されるが、その演奏にあたって手の動きで指示されるアルシスとテージスが非常に重要な役割を果たすのである。

休みとは日常的な場合を考えても単なる何もしないときなのではなく、必ず次に起こることの準備になっているのである。それが本当に何もしなくなると言う意味の休みになるのは本当の終わり、つまり死と言う状態だけだろう。

休みからは常に新しいものが始まるのである。

ここでもう一つ、音楽的な無音から非常に新しい概念が提示された例をあげてみよう。

1952年といえば第二次世界大戦が終わってまだ間もなく、世界はようやく戦後から立ち直り始めていた頃だったが、芸術の世界では新しい動向が顕著に始まっていた。この頃にはあらゆるムーブメントが渦巻いていたが、その中で現代のメディアの方向性を指し示す試

行が行われていた。これを代表するものが「4'33"」である。

「4'33"」はアメリカの作曲家ジョン・ケージが1952年に発表したピアノのための作品である。この作品が特殊なのは、その演奏の間中、音が一つもしないことである。この作品の演奏会ではピアノの前に座ったピアニストが四分三十三秒の間全く演奏をせず、時間が立つとそのまま引っ込んでしまう。「4'33"」はそのようなピアノ曲なのである。ここでジョン・ケージは音楽的に無音の状態の中で聞こえる様々な音を、聴衆が自分で集め音楽として聴くようにと言う設定を行ったのである。

この曲は大変に理解が難しい。場合によるとふざけていると思われる可能性もある。しかしこの曲で非常に重要なのは、音楽が音楽家の側つまり作曲家や演奏家の位置で出来上がるのではなく、聴衆の側で出来上がるという点なのである。これまでは音楽家の側から完結した形で一方的に送られてきた音楽が、受け取り側であった聴衆の中で作られるようになった訳で、まさに音楽という情報の受渡しの形態の中で画期的な提案だったのである。

これは情報メディアとして考えると、現代の特性である「アクセス側の主体性に於て成立するメディア」がこの時点で提案されたと言うことで、その先見性には敬意を表さなければならないのである。

この「アクセス側の主体性に於て成立するメディア」は、コンピュータのテクノロジーを基盤として、現代の社会の中で非常に急速に展開し普及し現代の社会を支えるインフラストラクチャーとなろうとしている。

現代のように非常に情報量が多く、緊張の高い社会では、それを支えるこのような機能の高いメディアが不可欠なのである。

このように見てくると、いろいろと性格の差はあるが、音のあるべき所での音の無い時空というのは、そこに人を引き込み、そこから新しいものをうみだす強い生産力を持った物であるように思われるのである。